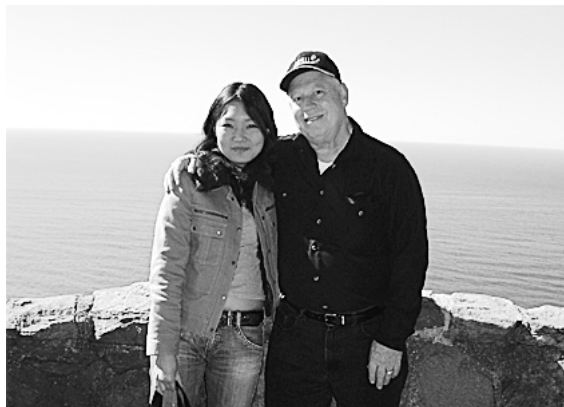


2, homesick

こちらに来てからというもの、ずっと日本の家を恋しく思い、ほぼ毎日というほどに家に電話をかけていました。

何度答えを求めていても回答はでないまま平行線。ここはアメリカ。日本の家族と同じように暮らしては、またカルチャーショックを受けてしまうと思いました。そうとはいえどうしてもまた親の声が聞きたくなるものです。

いつもは親の大切さなど感じることはないけれども、本当はすごく大切な存在であると痛感しました。いつもは、私自身のことはあまり親になど話しませんが、限界を超えると自然と人に何か答えを求めるなどということではなく、ただ声を聞きたいと思いはじめました。



留学中：オレゴンにて、ホスト・ファーザーと

これも留学でしかわからなかったことだと思います。ホームシックをうまく乗り越えられればずっとこの留学生活を乗りきって毎日楽しいはずです。家族友達は私にとって生きる最大のサポート役なのだと痛感しました。

アメリカのホームステイのファミリーは、受け入れた学生が生活を送っていくうえで、どうやってその不安を取り除いたらいいのか、きっとどちらも試行錯誤であったと思います。一緒にディナーを食べるなど、日常生活を共にすることによって、すごく不安から解消されていった気がします。

ホームシックは日ごとに全然表情が違います。気をつけて考えないと、それが支配するのを止められません。



堀 真知子
ほり まちこ
早稲田大学理工学部 3年
社会環境工学専攻
University of Oregon
留学中

3、サンクスギビング

サンクスギビングは、こちらの人にとって最高に盛り上がるイベントのひとつです。私も、ホームステイのファミリーにとっても、やはりこのイベントはすごく重要だと思います。ターキーにたくさんのパイなどおなががいっぱいになるほど食べました。ほんとうにこっちの人のパワーには驚かされます。サンクスギビングのためにかける時間はほぼ一週間です。私のホストは料理好きのために、たくさんのベーカリーを焼いていました。

ホストの作ってくれるロールは最高においしいです。私のお気に入りのパンです。冬休みに入ったらこのパンの作り方を教わる約束をしています。サンクスギビングにはほとんどの近くの親戚が集まって、そのうち一人の家に集まってクリスチャンソングというものを歌いました。キリスト教というものが深く生活に結びついている

など感じました。ディナーを食べた後で私たちは聖書を読みました。

日本にいるときには体験できないことの連続です。

4、最後に

留学というのはいましかできないことだという自覚を持って、今をがんばって生きていこうと思います。

(2006年12月2日)



堀さんの3回目の留学エッセイです。

今回は、「Culture shock」「Homesick」と自分が抱える苦しみ、正直に伝えてくれました。

彼女の文章を読んで、1979年3月末、家内と子どもを日本に残し、私自身がUCLAに留学したばかりの日々を思い出しました。忘れていた、一人ぼっちでの留学の複雑な気持ちがよみがえってきました。

堀さんは、それを、自分の体験と気持ちを文章で語ってくれました。

私は留学時には土木工学を学んでいました。実は、堀さんも同じ勉強を、早稲田でしています。早稲田の私のクラスの別の受講生に「先生、堀さんのお父さんやってるね!」といわれて、嬉しく思ったことがあります。「今をがんばって生きていこうと思います。」で終わるこの原稿には、「いまのわたしにはこれで精一杯です。」との言葉が添えられていました。

「本当に苦しんでがんばっている人に『がんばって』と声をかけてはいけない」と、心理カウンセラーに言われたことがあります。しかし、この気持ちを伝えるためには・・・?

堀さん。アメリカの習慣に従って「Big Hug」を送ります。